

<中間型／速効型インスリン製剤>

いずれもヒトインスリン製剤（その他はアナログ製剤）

アナログ製剤：立体構造を変化させインスリン分子6量体の形成を阻害し、吸収を速やかにすることができた製剤

①速効型インスリンR

- アナログ製剤（超速効型）に比べ立ち上がりもピークに達するのも遅い
- **食前30分前**に注射し、予測通り30分後に食事をとらないと低血糖の危険性あり
→ アナログ製剤（超速効型）は**食直前**投与でよいため、打ち忘れが減る

②中間型インスリンN

- アナログ製剤（持効型）に比べ**明らかなピーク**がある
 - ・ 就寝前に中間型を注射した場合、夜間に低血糖を起こす危険性あり
 - ・ 翌朝、拮抗ホルモンによる高血糖（暁現象）を起こす危険性あり
- **作用持続時間が短い**ため、1日2回投与が必要となることが多い

○：採用 △：限定採用 ×：非採用

分類	ヒトインスリン 対象薬剤	採用 現行→提案	基準
速効型	ヒューマリンR注 100単位/mL	○ → ○	現行どおり、入院患者に使用する。
	ノボリンR注 フレックスペン	△ → △	使用例は 2名 のみ。 ヒューマログへの変更も検討。
中間型	ヒューマリンN注 カート	△ → △	使用例は 6名 のみ。 グラルギンBSへの変更も検討。
	ヒューマリンN注 100単位/mL	○ → ×	現在使用例なし。
	ノボリンN注 フレックスペン	△ → △	使用例は 2名 のみ。 グラルギンBSへの変更も検討。